

北海道旅行 2. 釧路湿原 迷い川

根室半島の観光には時間が足りず、断念して、釧路に入りました。釧路は「炉端焼き店」発祥の地だそうです。ホテルでチェックインを済ませると、コンシェルジュのおすすめのお店に、チケツも頂き、夕食にでかけました。なんと、お刺身盛り合わせと唐揚げが1080円です。山のような盛り合わせでした。申し訳なくて、海鞘の酢の物、牡蠣の蒸し物も注文しました。全て、新鮮で甘く、ぷっくりとして、美味。釧路に住みたいと思わず思ってしまった。海の幸と値段に弱い私です。

翌朝早く、湿原の西側の釧路市湿原展望台を目指しました。雅子さまはカヌーで川下りを体験され、自然の醍醐味を味わったようですが、余裕のない我々はサテライト(北斗)展望台までの往復コースのハンノキの原生林の中の木道を歩くことにしました。露や笹に木漏れ日が落ち、地面はふかふかと、しっとりとした感触です。



アマゾン川をクルーズした時、とうとうと水が流れる熱帯雨林は、のんびりした明るさがありましたが、この湿原もどこか似ています。湿原は土の層が深く重なり、保湿能力が高くて、固まった寒冷湖沼なのかしらと思いました。パッと開けた展望台から湿原が一望できました。広さを実感しました。解放感があり、たっぷりとした豊かさとおだやかさを感じます。木道はとてもよく整備されていて、足腰の弱った私たちにも快適なコースでした。1時間半くらいの往復の道すがら、クマ避けに大声を出しながら、話しました。そうしなさいと注意書きがありました。

湿原の中を通る直線道路としか言えないような道を通り、湿原を横断して東側へ走りぬけました。道々、様々な花が呼びかけます。路肩に車を止めて、ひそやかに咲いている花の姿を眺めて、同時に空を見上げて、その広さに、自分の小ささを実感しました。速度規制は何も書かれていない、それは60キロとのこと。対向車も少なく、歩いている人は皆無です。従って、とても滑らかな走りを満喫しながら、対岸の細岡展望台へと回りました。



そこからの眺めは遠くに雄阿寒岳、雌阿寒岳が望める雄大なものでした。ヨシ、スゲの茫々たる原野の中に、釧路川が蛇行しているのが見えます。また沼地も点在しています。人間を寄せ付けない自然の驚異、脅威。それはなんとという清潔感に溢れているのでしょうか。丹頂鶴の観察スポットもあり、さまざまな野鳥、野生動物が生息しているようですが、見つけることが出来ませんでした。ビジターズ・ラウンジでおいしい野葡萄のソフトクリームを舐めてから、湿原に別れを告げて北上しました。

釧路湿原は湧水で潤っていますが、その中を流れる釧路川は北の屈斜路湖を源流とし、なだらかに太平洋に注いでいます。屈斜路湖は大きい静かな湖でした。ガリラヤ湖を左右逆にする形と似ていて、大きさはガリラヤ湖の半分くらいですが、中に島がありました。湖岸は絶壁で、原生林で守られています。南に開けた岸边がありました。キャンプ場、ボート場もあり、別荘も点在しています。そこに砂場という温泉が湧きだす海水浴場がありました。砂を掘ると温水が出てきました。なだらかな山に囲まれた透明感のある親しみやすい場所でした。

蝦夷と呼ばれたこの地を、「北海道」という名前にするよう考案した松浦武四郎(1818-1888)の歌碑が建っていて、「汐ならぬ久壽里の湖に舟うけて身も若がえるこゝちこそすれ」と詠んでいます。